＜巻頭言＞

# 社会教育における「風化」の意味

筑波大学人間系教授　手打 明敏

今日、「風化」ということばは、「東日本大震災の風化」とか「原子力発電所事故の風化」のように、被災地で現在も続く復興の取り組みが忘れされつつあることや、福島第一原子力発電所の原子炉爆発による放射線による広範囲な汚染による住み慣れた地域から避難している人々の苦難を忘れ、原子力発電所の運転再開を目指す動きを指して使われている。このように記憶や印象が月日とともに薄れていくという意味とは別に、『広辞苑』をひくと、「風化」には「徳によって教化すること」とある。教育的な意味をもつ用語なのである。

現在では、社会教育の概論書等をみてもこのことばを使って社会教育概念を説明しているものは見当たらないが、わたくしが社会教育を学び始めた1970年代半ばごろには、このことばを使って社会教育概念を説明する概論書があった。今日では、この言葉を使わなくても社会教育の「教育」の特徴を説明できる概念がつくりだされているともいえる。しかしながら、わが国の戦後の社会教育研究の先陣が切り開いた研究に思いをはせ、あらためて社会教育にとっての「風化」の意味について確認しておくことも意味があると思う。

1973 年に刊行された小川利夫・倉内史郎編『社会教育講義』(明治図書) の「Ⅰ　社会教育の概念」(橋口菊執筆) は、次のように説明している。

橋口は、社会教育が未定型な未組織の教育を含む活動であることを論じたうえで、社会教育における「教育」の範疇が、極めて広義のものであり、かつそれが、未組織的な教育であることを特徴とする、と指摘している。一つには社会教育が、実は、政治的、社会的、文化的諸活動など、教育の分野以外の他の社会的諸機能と未分化のかたちで行なわれる人間に対する意図的な働きかけである「教化」の概念とともに社会事業、福祉事業と社会教育との関連から出てくる「風化」の概念を含んでいると指摘している。社会事業の「精神的側面」は、すなわち「教育的側面」の活動ははっきり社会教育と呼ばれていたのである。特にそこにおける「風化」の概念は、「夫れ救貧は末にして防貧は本なり。防貧は委にして風化は源なり」(井上友一『救済制度要義』1909 年 (明治 42 年)) であらわされているように、救貧よりも防貧、防貧よりも教化が根本的であり、社会事業における社会教育活動を特に積極的に重視するものであった。

このように、学校教育における「教育」が、相対的には独自の教育分野を成立させているのに対して、社会教育における「教育」のなかには、「教化」や「風化」のように、他の政治的、社会的諸活動として行なわれる教育的活動を含んでいるのが特徴なのである。

こうした特徴を持つ社会教育をして堀秀彦は『教育学以前』(1940 年) と表現した。戦後の社会教育学研究は、学校教育とは相対的に区別される社会教育の「教育」の独自性を解明すべく蓄積を積んできた。しかし、社会教育の「体系化」、「科学化」を追求することに専念するあまり、社会教育のもつ「自由」、「多義性」を見失っていないか、留意する必要があると思う。